



TITLE:

中世前期公家政権と西園寺家(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

山岡, 瞳

CITATION:

山岡, 瞳. 中世前期公家政権と西園寺家. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20472>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	山岡 瞳
論文題目	中世前期公家政権と西園寺家		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、鎌倉時代に公武関係を仲介する関東申次を世襲するとともに、歴代天皇の外戚となって、朝廷において大きな勢力を築いた西園寺家について、政治史・家政機関などの諸方面から考察を加えたものである。</p> <p>まず序章において、鎌倉時代の公家政権に関する研究史が丁寧に整理されている。院・女院・摂関家については、その政治的動向や、家政機関・内部構造が研究されているのに対し、公家政権において重きをなし、政治的に重要な役割を果たしている西園寺家の実態が未解明であるとの問題提起がなされる。</p> <p>第一章「鎌倉時代前期の公武政権と西園寺公経」では、承久の乱で幕府を支援し、乱後に大きな政治的地位を築いた西園寺公経の生涯を辿りながら、その政治的立場や、天皇家・摂関家などとの関係を考察した。従来、後鳥羽上皇と公経との関係悪化は、建保5年（1217）における右大将人事、あるいは公経の斡旋による、摂家将軍九条頼経の鎌倉下向が原因とされてきたのに対し、本論文では承久2年（1220）に公経が後鳥羽から経済的収益の大きい左馬寮を与えられた事を明らかにし、承久の乱直前まで表面上は協調していたことを指摘した。また、承久の乱後に権力をふるった公経が、摂関の人事を左右するとともに、自身は輦車の宣旨を受けずに牛車の宣旨を受け、子息実藤に摂関家嫡男にのみ許されてきた「五位中将」を与えるなど、摂関家に匹敵する特権を得ていた事を明らかにした。</p> <p>第二章「鎌倉時代中・後期の公武政権と西園寺家」では、公経の子実兼が、関東申次の立場を利用し、鎌倉幕府と結びながら西園寺家の政治的地位を向上・維持するために様々な方策を採ったことを論じた。とくに、西園寺家と、同家の庶流で天皇家の外戚として台頭した洞院家との対立の具体的様相を解明し、洞院家が大覚寺統の外戚となったのに対し、幕府を介して持明院統と結び、外戚の座を得たこと、左馬寮の知行権をめぐり両家の間で争奪が繰り返された背景には、治天の君の意向があったことなどを明らかにした。その一方で、西園寺家と洞院家とは仏事空間を共有しており、一族として結合する側面もあったことを指摘している。</p> <p>第三章「鎌倉時代における西園寺家の家人」では、西園寺家の政所・侍所などの家政機関に伺候した三善・橘・大江・中原諸氏の動向について考察した。三善氏が家政の中枢を担ったのをはじめとして、鎌倉時代中期から次第に家ごとの役割が生まれ、鎌倉時代後期になると職掌の役割分担が明確化する傾向が看取される。これは西園寺家の政治的地位の向上により、処理する案件が増え、効率の良い家政運営を迫られた結果と考えられる。家人の伺候形態は、西園寺家に重きを置く場合もあるが、鎌倉時代後期になっても必ずしも西園寺家に包摂されるだけでなく、他家にも伺候する場</p>			

合があった。これには、伺候する経緯や政治情勢、担当する業務内容が関係している。こうした西園寺家の家人の動向を通して、従来不明確であった鎌倉時代の下級官人の行動形態が解明された。

補論「侍長考」では、院宮の侍所のみ補任された侍長の考察を行った。侍長の職掌は多岐にわたり、必ずしも特定はできない。侍長の出自は、摂関期は下級官人のみであったが、院政期に入ると武士が補任されるようになり、在京活動を行う武士の子弟の出仕先の一つになった。しかし、鎌倉幕府の成立により、公家の御給のみを官位獲得の糸口としなくなったことで、東国に所領を有する軍事貴族層出身の侍長はみえなくなったが、京周辺に基盤を置く京武者的性格を帯びる武士からは引き続き侍長を出している。侍長を通して、院宮の侍所の実態が明らかとなり、さらに、その摂関～鎌倉期における出自を通して、権門の家政機関に祇候する侍層の変容が解明された。

第四章「西園寺家の邸宅」では、鎌倉時代における西園寺家の邸宅の変遷を考察した。西園寺家の主要な邸宅は、承久の乱後間もなく建設されているが、これは公経の政治的地位が急激に上昇したことが関係する。天皇家の外戚の地位を得たこともあって、実氏期になると邸宅を院御所や里内裏として提供している。多くの邸宅のうち、今出川第が西園寺家嫡流に相伝される重要な邸宅となったことが明らかになった。実兼期になると、北山第に大きな変化が起こる。それまでは、遊興や祖先祭祀、天皇・院・女院などの行幸・御幸の場として用いられ、西園寺家当主も一時的に滞在するに過ぎなかったものが、実兼が正安元年（1299）に出家し今出川第から北山第に移住してから、以後の北山第は西園寺家当主の出家引退後の居住空間となったのである。

終章では、本論文全体を総括するとともに、その学問的な意義に触れ、さらに南北朝期以降の西園寺家に関する展望を述べている。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、鎌倉時代の公家政権において、大きな勢力を誇った西園寺家について、政治的立場・家政機関職員・邸宅等の諸側面から分析を加えたものである。西園寺家は、鎌倉幕府との連携により政治的に大きな役割を果たしており、鎌倉中・後期の政治史、公武関係を知る上で不可欠の研究対象であった。しかし、鎌倉時代の公家政権自体の研究が低調であった上に、関係史料の多くが未刊行であるなど、研究に困難をともなったために、先行研究も僅少にとどまっていた。あえてこうした困難な課題に取り組んだ学位申請者の意欲は高く評価できる。

第一章では、西園寺家を大きく発展させた西園寺公経の生涯を辿り、主要な事績を取上げる。概ねその内容は概説に止まるが、承久の乱直前の承久2年(1220)に後鳥羽院が公経に富裕な左馬寮の知行を認めたとして、院と公経の対立が激化した時期に関する通説に一石を投じた点は今後の議論を呼ぶものと思われる。また、公経が摂関家との姻戚関係を通して摂関人事を掌握し、子息の官位・特権で摂関家に対抗したことなどの指摘は、摂関家に権威で劣るものの実力で凌駕した西園寺の立場・行動を考える上で重要な意味を持つ。

第二章では、鎌倉中・後期における西園寺実氏・実兼と、実氏の弟実雄に始まる分家洞院家との関係が論じられる。洞院家の問題は、従来等閑視されており、両家の対立を具体的に検討した意味は大きい。重大な経済基盤である左馬寮争奪の実態を解明した点は重要な意味を持つ。また大覚寺統の外戚となった洞院家に対抗すべく、西園寺家が関東申次の立場を利用して幕府と提携し、持明院統の復権を企図したとする指摘も、やや雑駁ではあるが注目してよい。

第三章では、西園寺家に仕えた家人を網羅的に精査し、その実態を明らかにしている。未刊行の史料も含む膨大な史料の検討に基づく労作と評価できる。西園寺家の家司として従来から注目されてきた三善氏について、承久の乱以降における活動の実態を解明するとともに、その他の氏族の動向、役割分担なども明らかにしている。鎌倉時代における家政機関や家人の動向は、院・摂関家を除いてほとんど未解明のままであり、その意味で大きな意味を有する研究といえる。

補論は、第三章の研究に関連した公家家人に関する研究である。公家に仕える六位以下の官人である侍の中で、とくに「侍長」と称される存在に着目し、その実態を解明している。この研究も、第三章と同様に史料の精査に基づく労作である。従来、女性の院宮にのみ存在するとされた侍長が親王家などにも存在したこと、軍事貴族層の登竜門という性格を有したことなどを明らかにした。中世前期における下級官人の動向を知る上で有意義な研究である。

第四章では、西園寺家の邸宅に検討を加えている。文献の精査はもとより、最新の発掘の成果も活用した意欲的な内容である。西園寺家の邸宅では、北山第が著名であるが、それ以外の邸宅・別荘を網羅し、その使用目的の変化を解明した。とくに、今出川第を本宅と位置づけた点、北山第についても、実兼の段階までは、遊興・仏事など、限定された目的で使用されていたこと、実兼もこれを本宅としたわけではなく、

隠居後の居所であったことなどを明らかにした点は、注目すべき成果である。

総じて本論文は、史料の未刊行などによる制約で未解明であった事実を、精力的な史料の調査によって解明した点で高く評価される。しかし不十分な点も少なくない。

政治史的な分析が甘く、個別には興味深い点があるものの、第一章・第二章は概説に止まっている部分が多い。第三章では、多数の事例が提示されているにもかかわらず、分析の対象となったのは一部の氏族のみで、院・摂関家の家政機関との対比も不十分である。補論も、一般の侍との比較が物足りない。第四章も、洛外の北山第の重要性を指摘しながら、院の鳥羽殿、摂関家の宇治など、他権門の洛外における別荘との対比がなされなかったのは惜しまれる。このように課題は残るが、今後申請者が研究を進める中で克服されるものと思われる。

以上のように、若干の問題点はあるものの、本論文が大変な労作であり、西園寺家に関する研究はもとより、鎌倉時代の政治史研究に大きく貢献することは疑いない。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降